

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「よい蜘蛛 よい蜘蛛」

今日も隠れ家の古民家で、私的な会合（ほんとは宴会）をしていた時のこと。壁になにやら怪しい点が。目をこらしてよくよく見れば、なんと一匹の蜘蛛！上越地方の山奥からこの新潟市に移築したせいも、90年近く歳月を経た梁や柱といっしょに蜘蛛連中も引っ越してきたようで、人が集まり宴たけなわの時に限って、ツツ〜とどこからともなく現われるのです。

「うわっ、蜘蛛！しっし」

「ワインかけよか？」

「だめですて、壁に染みができますて！」

「いやいや君たち、宵の蜘蛛は、そっとしておくのだよ」と提案したのは上越地方出身の某氏。酔人の話の中にも真実ありで、「見なかったことにしよう」「そうしよう」と、会は厳かに進められました。

子供のころ物知りの祖母が「蜘蛛は縁起がいいけど夜の蜘蛛は縁起が悪いからそっとしておくか、こう唱えるとよい」とっていた呪文「よい蜘蛛 よい蜘蛛」を思い出しました。子供のころは、祖母独特の理念？かと思っていたのですが、上越地方はじめ県内各地では、朝の蜘蛛は縁起が良いけど、宵の蜘蛛は縁起が悪い、と昔から言われていたようです。

調べてみると、なぜか全国的に宵の蜘蛛は縁起が悪いとされています。

古くは『日本書紀』『古今和歌集』に、「朝、蜘蛛が笹の葉に糸を張っていると恋しい人が夜訪れるのよ、ふふ」という歌がありますから、朝の蜘蛛は昔々の人にとって縁起の良い象徴でした。それと対になるように、やがて宵の蜘蛛は縁起の良くないも

のとしてとらえられていったのでしょうか。とはいえ、京都を中心とした近畿地方では、朝の蜘蛛は縁起が悪いともいわれ、所変われば・・・の観もあります。

もっとも、昆虫の仲間には入らず、クモ科として異端視の生物ですから、気味の悪い存在とされていたのも事実です。細い糸（新潟では蜘蛛のヤジともいいます）を張り昆虫をからめとるために、ひっそりと息をひそめている蜘蛛の姿は、来ぬ人をじーと待っているような不気味な執念が感じられます。とはいえ、見方を変えれば、害虫退治の役目も果たす蜘蛛氏はある意味で存在価値もあります。

そんな蜘蛛を気遣ったのか、宵と良いとをかけて「よい蜘蛛、よい蜘蛛」と唱える新潟版呪文は、生き物を思いやる気持ちがこめられている温かなことばのように思われます。

自然豊かな新潟は、かつての子供にとって、蜘蛛も蜂も遊びの仲間でした。

蜂がブーンと近づいてこようものなら、「蜂 蜂 どんべちゃ、おらばっかほぼだ」（蜂さん、蜂さん、ごめんだよ、僕まだ子供だから、来ないでねの意）とこれまた新潟版呪文を唱えます。するとあら不思議、蜂は刺さずにどこかにいってしまうとされています。

「よい蜘蛛、よい蜘蛛」、暮らしや遊びのなかのことばにも、新潟人のやさしいまなざしが息づいています。

